

《講演録》

本質主義と構築主義
ーバイリンガルのアイデンティティ研究をするためにー

箕浦 康子（お茶の水女子大学 名誉教授）

ymino@s8.dion.ne.jp

Essentialism vs. Constructionism :
In Order to Study Identities of Bilinguals
MINOURA Yasuko

ただいまご紹介に預かりました箕浦と申します。

今日の講演にあたって主催者の湯川先生のほうから、この研究会ではどのようにして継承語なり母語なりバイリンガルなり、言語をどのようにして教えるかということについては従来から会員の間で話し合いも討論もしてきた。しかし、手薄なのは、そういった言語の背景にあるアイデンティティの問題、特に文化的アイデンティティの問題、それと絡めて言語をどういうふうに研究していくかということ、講演では文化的アイデンティティそのものをどういうふうに研究していくのかということについて、話をしてほしいということでした。それで私が選びましたのが、本質主義と構築主義というテーマです。皆さんの中で本質主義とか構築主義という言葉聞いたことがあるかたはどのくらいいらっしゃるか、挙手願えますか？意外と少ないんですね。じゃあそういうことを考慮しながらお話したいと思います。本質主義や構築主義という考え方は文化人類学者や社会学者のなかでは、これがなくては話が進まないというくらい深く浸透しています。本質主義から構築主義への移りゆきというものがあらゆる研究に影響を与えているので、そのことも踏まえてお話したいと思います。

【文化的アイデンティティ研究の難しさ】スライド2

まず文化的アイデンティティのことですけれども、文化的アイデンティティ研究が、難しいこと、どういうふうに舵をとっていいかわかりにくい原因が二つあると思うんですね。ひとつは研究方法論上の揺れ、その研究方法論といわれているものが本質主義から構築主義へと人文科学、行動科学といわれる分野で移ってきた。そのことに無自覚であると、自分はどっちの軸にそって研究をしているのかがわからなくなります。研究方法論は研究方法と違います。後者はデータをどのように集めるかということですが、

研究方法論というのはもっと基底をなすようなことで、現実をどうみるかとか、そういう話ですよね。それが本質主義と構築主義の間で違うということ、それが文化的アイデンティティ研究の難しさのひとつです。

もうひとつは、文化的アイデンティティという限りは、文化が問題になるんですが、文化というものをどうとらえるか、つまり文化概念ですね。文化をどのようなものとして考えるかという文化の概念化のしかた

が揺れだしたということです。1980年代の中ごろに文化人類学では大きな転換点があって、その文化人類学での転換が、社会学、心理学、それから言語学という他の分野にずっと広がっていったということなんですね。そして文化をどのように捉えるかは、必然的に文化的アイデンティティをどのように概念化していくのか、どのように研究していくかということに大きく影響するわけです。この二つの揺れというものがどういうものであったかということ、はじめに研究方法論上の揺れ、それから文化概念の揺れという順に説明していきます。文化概念の揺れというものと方法論上の揺れはリンクしていますから、そのリンクの中でどのような新しいアイデンティティ研究の考え方とか手法が出てきたかという、そういう順番で今日の話を進めたいと思います。

文化的アイデンティティ研究の難しさ

- 1) 研究方法論のユレ
本質主義 vs. 構築主義
- 2) 文化概念のユレ
「文化」をどのようなものとするか？
1980年代中葉に大きな転換点
文化人類学から他分野へ広がっていく
「文化的アイデンティティ」の概念化に必然的に影響

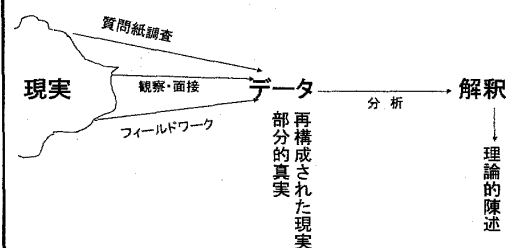
スライド2

【研究とは】スライド3

はじめに、研究方法論上の揺れということから話します。研究方法論に入る前に、「研究」というものがどのようなプロセスを通じてなされるかということを振り返ってみます。人が言葉を交わしているとか、継承語を教えているとかバイリンガル教育をしている教室とか、お父さんとお母さんのことばが違う中で子供が育っている家庭とか、要するに人々が様々な経験をしている現実（スライド3参照）がありますよね。

研究というかぎりは何らかの方法で現実からデータを取ってこなければならない。教室で教えているとか家庭で会話している

人が生活している場(現実)からデータを採集するさまざまな手法



スライド3

「現実」そのものをいきなり分析することはできないんですね。研究するためには、何らかの形で現実をデータ化しないとイケない。みなさんがよく知っておられる質問紙調査では、「つぎのことのうちであなたの気持ちにあうのはどれですか」という質問に、yes or noで答えるガットマン方式の問い方があったり、「あなたは継承語教育の必要度をどのように考えるか」という問いに対して、「非常に継承語教育をすべきである」から「そういうことはある程度必要である」、「ホスト社会の言語に同化したほうがいい」まで五段階評価のうち自分の気持ちに一番近いものを選んでもらう、これはリッカート方式の問い方ですよね。質問紙を目の前にして、各質問項目に○をしていくとか短い単語を記入していく。これが質問紙調査ですが、「現実」そのものよりも、回答者の頭のなかに何があるかということデータをデータ化しているわけですよね。観察とか面接という研究方法は、現実の教室場面を観察するとか先生に面接するとか、補習クラスに入ってフィールドワークし、見たことや聞いたことをフィールドノートに記載する。記載したものは、「現実」を言語化したデータです。質問紙調査の場合は、コード化した数列がデータになるわけですよね。そしてそのデータというのは現実のある要素を抽出したものであり、分析対象となるのはここ（現実）ではなくて、このデータなのです。基本的に研究といわれているのはこういう流れをとっているわけです。研究という営為では、現実そのものではなく、データが分析対象になるがゆえに、存在論とか認識論が関わってきます。

【諸科学の前提としての存在論・認識論】スライド4, 5

本質主義と構築主義の話をする前にキーとなる二つの哲学的な概念、存在論 (ontology) と認識論 (epistemology) について説明します。それらはどんな研究にも含まれている、ただ自覚していないだけであって、どんな研究も何らかの ontology と何らかの epistemology に基づいて実施されています。ontology (存在論) というのは現実というものの、研究の対象となっている現実というものをどのようなものと措定するかということです。措定のしかたが二つあり、現実というものは客観的実相として存在するという考えが実在論といわれているものなんですね。もうひとつは現実は、客観的現実として存在するのではない。純

諸科学の前提としての存在論・認識論

- ・ 存在論と認識論は、諸科学の知識的・信念的体系の原理的・枠組的な次元(ヒュポダイム)
- ・ 廣松 渉 1988 新哲学入門(岩波新書)
 - (1) 認識するとはどういうことか (客観主義vs主観主義)
 - (2) 存在するとはどういうことか (実在論vs反実在論)
 - (3) 実践するとはどういうことか

存在論

「客観的実相自体」は存在する(実在論)のか、
 「純然たる客観的実相自体」は存在しないのか。

スライド4

然たる客観的な実相は存在しないと考える反実在論、今の科学哲学の世界ではその二つがあるんですね。(スライド4参照)

認識論というのは何かというと、このデータの背後にはデータをとっている研究者がいるはずですね。データを取っている研究者が現実というものをどのように認識するのかということで、私の認識活動とは独立して現実というものが存在するという考え方(スライド5の objectivism)と、私がどのような問いを発するかということによって現実がどのように立ち現われてくるかが決まるのであって、現実というものは私自身と見ている現実との相互作用のなかで構築されるという考え(スライド5の subjectivism)があります。そういう二つの考え方があるんですね。認識論というのは私と研究対象との関係性、存在論というのは研究対象そのものをどのようなものとして措定するのかということ、この二つがあるんですね。

認識論と存在論の組み合わせは、4種類あります(スライド5)。

存在論には先ほど言いましたように実在論と反実在論があります。反実在論は、客観的な実相は存在しなくてすべては言語により作られているという極端な考え方で、いわゆるポストモダンの人たちの立場です。認識論には大きく分けて、objectivism と subjectivism があります。subjectivism といわれているのは、私の subjectivity を抜きにして実在にアプローチすることは

できませんという考え。objectivism は、

私とは無関係に外界に「現実」というものが存在しますという考えなんですね。そして、本質主義と社会構築主義という2つのメタアプローチが生まれます。存在論的には実在論に立ちながら認識論では客観主義に立つ、そのようなスタンスでの研究が論理実証主義といわれているものです。論理実証主義は別の言葉では本質主義とか essentialism といわれます。それから認識論では subjectivism の立場をとりながら、存在論では実在論に立つのが社会構築主義。社会構築主義のなかには解釈主義的アプローチと批判的アプローチがありますが、後でこのお話はします。まずは、論理実証主義と構築主義の二つがあると頭に入れておいてください。従来、心理学は論理実証主義だったわけですね。私自身も1950年代の後半から60年代にかけて心理学を勉強したときもこの論理実証主義こそ科学のやり方であると教えられました。社会構築主義という考えは出てい

存在論・認識論上のpositioningとメタ・アプローチ

	認識論 (Epistemology)	
	Objectivism	Subjectivism
存在論	論理実証主義 (本質主義)	社会構築主義 (解釈的 vs. 批判的)
反実在論	X	ポストモダンの一部?

認識論
存在界の法則と称されるものは、「客観的与件
と主観的活動の協働の所産」(構築主義)

スライド5

なかったので、科学の基本としての論理実証主義をずっとずっと叩き込まれました。UCLA で博士論文を書いた1970年代後半は、論理実証主義が行動科学全般を覆っており、構築主義という考え方は全然ない時代でした。このような中で、私は、異文化体験とアイデンティティの研究を始めましたので、当初は論理実証主義であったということになります。

【諸科学の前提としての存在論・認識論】スライド4

それでは、一つ前のスライドに戻ります。結局、この辺のことは要するに科学哲学の主題です。存在論とか認識論と言うのは、諸科学の大前提になっている知識的、信念体系の原理的枠組み次元のことであって、ヒュポダイムと哲学ではいうらしい。これについては非常に良い入門書があります。廣松渉さんの書かれた岩波新書『新哲学入門』、だいぶ古い本ですが、この本を読んだら非常に良くわかると思うのです。3つの章からなっています。ひとつの章は「認識するとはどういうことか」で、科学哲学史の流れのなかでの客観主義と主観主義のことが哲学者の立場から述べられています。「存在するとはどういうことか」という章では、実在論と反実在論について解説されています。「実践するとはどういうことか」が最後の章です。「教育」という営為は、実践そのものですが、本日は前者2つに集中し、「実践」は扱いません。もう少し、哲学的にきちっとした議論の欲しい方は廣松渉さんの本をお読みください。廣松渉さんの本にはこれらのことを本格的に考察した分厚い本もありますが、まずはこの岩波新書あたりから始めるのがいいと思うんです。存在論と認識論、それぞれでどのような立場をとるかで、論理実証主義的なスタンスと社会構築主義のスタンスが生じてくるという点をご了解いただけたと思うんですね。

【現実世界の把握様式と認識論上の positioning】スライド6

論理実証主義（本質主義）とか構築主義といわれているメタレベルの論議が、研究という営為にどのような違いを生じさせるのかということをお話していこうと思うんですね。要するにメタ的なお話、データをどう取るかといったことではなく、データを取るスタンスを決めていくメタアプローチの話です。論理実証主義というのは心理学とか、社会学とか、文化人類学研究の1980年代中葉以前の研究が取っていたスタンス。論理実証主義しかなく、それが唯一の科学の方法論だと信じられていたんですよ。1980年代の半ごろから社会科学とか人文科学の研究者が研究対象として見つめている現実そのものが、グローバル化で変わってきた。今まで不変とか固定的だと思われてい

たものが、揺れだしたということと構築主義の考え方が勢力を増してきたことにはつながりがあると思うんです。

構築主義のなかには、解釈的アプローチと批判的アプローチがありまして、解釈的アプローチというのは私がフィールドワークをするときの基本的な立場です。昔々の若いときは別ですけども、1990年代以降、自分の研究対象の変化にあわせてシフトせざるを得ないようになってきた。批判

的アプローチというのは、フェミニズムとか批判的教育学の系譜です。解釈的アプローチは、データとは再構築された部分的真実であって、全体的真実というのは不可知という考えですね。私がどういう問いを発するかによって現実がどういうものとして見えてくるのかが決まってくる。問いの発し方が変われば見えてくる現実も変わってくる。私がフィールドワークを教えるときは、公園のすべり台で遊んでいる子供たちのビデオをグループで分析してもらいます。すると、同じビデオを見ていても、グループによって問いが違えば、映像のどこを見るかに違いがでてきます。データというものはこちらの問いに応じてemerge（見えてくる）するものであること、私たちが把握できるのは、部分的現実でしかないことを、学生たちはこの実習で体得してくれます。今日は主題が違いますので、データというのはこちらがどういう問いを発するかで見えてくるもの、換言すれば、問いに応じて再構成された部分的真実であるということ、そこだけをわかっていただいたらよろしいかと思うんです。

論理実証主義と解釈的アプローチと批判的アプローチという、三つのメタアプローチのいずれかがどの研究の背景にもあります。みなさんが言語の研究をする時も、自分がどの立場に立って研究をしているのかに自覚的になった方がよろしいかと思います。みんながやっているようにやっている場合は、無自覚的に論理実証主義的メタアプローチにだいたいなってしまうと見ていいでしょう。

【現実の把握様式】スライド7

ここで、みなさんの頭のなかで表をつくり、論理実証主義、解釈的アプローチ、批判的アプローチという三つのコラムを並べて、横の行にこれから言うものを入れていってくださいね。横の一行目が「現実の把握様式」。論理実証主義では、ただひとつの社会

現実世界の把握様式(メタアプローチ) ～認識論上のpositioning～

- ・ 論理実証主義(Logical Positivism)
従来の心理学・社会学・文化人類学研究の立場
本質主義(Essentialism)とも呼ばれる
- ・ 構築主義(Social Constructionism)
 - (1) 解釈的アプローチ
私がフィールドワークをするときの立場
データとは再構成された部分的現実である
 - (2) 批判的アプローチ
フェミニズムや批判的教育学の立場
再構成されたものなら、造りかえられる

スライド6

的現実があるとして、その現実についての法則定立をめざす。現実是谁が見ようとも同じに見える客観的で、本質的なものとして実在しているという実在論の立場に立ちます。それに対して解釈的アプローチというのは、様々な相貌を見せるマルチなものが現実であって、われわれが研究をするときにデータとして扱っているのは、常に reality remade、作られたリアリティ、remade ですから当事者もしくは観察者に

よって再構成されたリアリティでしかないんだという考え方に立ちます。われわれが生きている現実というものは構築されたものである、その構築されたものを真なるものと思ひ込み、その世界の中に生きているのだと考えます。たとえば女性というものはこうあらねばならない、お母さんとはこうあらねばならない、家庭とはこうあらねばならないという思ひ込み、思ひ込みの世界を現実と受け止めているのだという考えが解釈的アプローチです。共同幻想というのは、多数の人が同じような思ひ込みをしている場合、それが「現実」と解釈されちゃうんです。そういった思ひ込みの世界で生きていると考えるのが解釈的アプローチ。

批判的アプローチとは何かというと、思ひ込みなら、あなたがどのような思ひ込みの世界に生きているのかを解きほぐすことができると考える。「女性なるもの」という構築された性を解きほぐす（脱構築という言葉を使う）ことで、思ひ込みの呪縛から解放することができる、フェミニズムはそれを実践したわけです。それから構築されたものなら作り変えることができるというのは、教育の場合にも当て嵌まり、批判的教育学といわれている一派（ジルーとかフレイレといわれている人たちの流れ）があります。批判的教育学は、教育とはかくあるべきと言われたものをもう一度問い直す。教師とはこうあらねばならない、学校とはこうあらねばならないという思ひ込みを解くほぐし、新しいかたちの教育を考え、新しい形の学校を作ってみるとか、新しい形の教育法をやってみるとかを、従来への批判というかたちの中で展開しています。

論理実証主義、解釈的アプローチ、批判的アプローチと三つのメタアプローチが現実をどのように捉えるかにこのような大きな違いがあります。

現実の把握様式

- (実証的) ただ一つの客観的現実を前提として、その現実についての法則定立をめざす。
 現実とは、誰が見ようと同じに見える「本質的なもの」として実在している。
- (解釈的) 現実とはさまざまな相貌をみせるマルチなもの
 Reality Remade
 人々が生きている現実とは、構築されたものである。思ひ込みの世界で生きている。
- (批判的) 構築されたものなら、作りかえることができる(現実の脱構築)。

スライド7

【研究とは？】スライド8

研究とはどういうことかという観念 (theoretical imperative) についても、3つのメタアプローチには違いがあるわけ・

・。論理実証主義的メタアプローチではも
のごとには本質があり、その本質を解明することが科学の仕事であると考えます。混沌とした世界に法則を見出すことで因果関係を明らかにする、それこそが本質である、それをやるのが研究者の仕事であるとい

研究とは？ (Theoretical Imperatives)

- ・ 論理実証主義的アプローチ:
物事には本質があり、その本質を解明することが科学の仕事、因果関係の探求(causal explanation)
混沌とした世界に法則を見出し、秩序をもたらす
- ・ 解釈的アプローチ:
理解 (interpretive understanding)
- ・ 批判的アプローチ:
批判意識の覚醒・エンパワメント
権力によって作為的に創出された観念の脱構築

スライド8

うふうに考えるのがこのメタアプローチですね。それに対して、解釈的アプローチというのは法則を見つけようとはしない、対象になっている現実というものを理解することが中心となります。Interpretive understanding が研究ということになります。だから、論理実証主義では explanation、どのようにしてそれが起こっていることを説明(account) することが重要ですが、解釈的アプローチでは説明することよりも理解すること、理解することの一部には explanation も入ってきますけれども understand ということを重視します。

それに対して批判的アプローチというのは批判的意識の覚醒とかエンパワメント(力づける)することを研究の本務と考えます。「エンパワメント」というのは、たとえば途上国の人々とか、日本のマイノリティの人々がどうして自分は劣位に置かれるのかとか、自分のマイノリティの言葉を話すことに引け目をなぜ感じるのかといった事象の背景を理解、それに対抗する言説を組み立てる実践力を身に付けることです。「引け目に思う」のは当事者側に固有の何か原因があると考え、それを探そうとするのは本質主義的な考え方、それに対して批判的アプローチというのは私がマイノリティの言葉を学校で話すことに引け目を感じる背景には、私が社会構造上どのような立場に置かれているかと関係がある、その関係性を洞察することが批判的意識の覚醒ですよね。自分の社会構造上のポジションというものを批判的に検証することによって、主体的に自分の立場を選び取れるようになる(ポジショニングという)ことがエンパワメント。自分自身何かができると思い、私が私の主人公でありうる、社会によって受身の立場を取らされることに対して抵抗し、自分の立場を選び取る力を得ること、それがエンパワメントということですよ。マイノリティがどのようなメカニズムによって作り出されているのか、女性というものが、男性より低く社会的に構築されているメカニズムを解き明

かして、そこから脱していく。そのようなことを脱構築 (deconstruction) といいます。構築されているものならそれをつくりかえていくことができると考えるのが批判的アプローチです。

【研究の目的とフォーカス】スライド9, 10

「研究とは何か」についての三つのメタアプローチの考えの違いは、「現実をどう捉えるのか」のみならず、「研究の目的をどこに置くか」ということにも、違いをもたらします。実証的アプローチは法則を見つけようとします。人間行動を律している普遍的な法則を見つけ出すことが目的なので、立命館の学生を被験者とした研究で見つけられた人間関係に関する法則は、アメリカでも中国でも通用するはずという形で、

研究の目的

- (実証的) 人間行動を律している普遍的な法則の定立 知見の一般化
- (解釈的) 特定状況における人間行動の規則性についての理解の共有 知見の比較
- (批判的) 結果を分析して不平等をあばき、解放のスタンスを育む

スライド9

知見の一般化 (generalization) を図ろうとします。人間行動に関しての法則はかくかくであるといった法則を定立することを目指すのが、本質主義とか論理実証主義と言われているものです。それに対して解釈的アプローチは、解釈というのはコンテキストと人との結び合いの中で生まれる、コンテキストの中における人間行動という意味では、特定状況下における人間行動の知見 (規則性があるかも知れない) を共有しようとしませんが、その理解がすべての人間に当てはまるとは考えません。その特定状況における人間行動と考えます。特定状況下の人間行動の比較は可能としてもですよ。たとえば、神戸におけるベトナム人マイノリティの行動とオーストラリアにおけるベトナム人マイノリティ、それからアメリカにおけるベトナム人マイノリティ、全部ボートピープルとして本国を出た人たちですが、定住したホスト社会によって、ベトナム語の維持のされ方を比較、検討することは可能ですよね。その母語の維持という人間行動をコンテキストとの結び合いの中で理解することを重視します。本質主義は、脱コンテキスト化したかたちで人間行動を理解しようとしたことが、解釈的アプローチではそういうことはやらない。論理実証主義の本質主義的な人間観と違い、構築主義では、人間にはなんらかの本質的な共通性があるというふうに思っていないから、本質があると思っている論理実証主義とは違う研究方法論をとります。批判的アプローチでは、不平等、開放のスタンスを育むというのが、研究の目的となりますが、先にスライド8で説明したよ

うなことと同じことですので、省きますね。

「研究の目的」とか「研究とは何か」が違ってくれば、研究のフォーカスも違ってくるわけですね。(スライド10参照) 客観的な事実というものがあるということを前提にして、しかるべき手続きをとればその客観的事実というものを把握できるという、そういう世界観の中に生きているというのが論理実証主義ですから、観察できる行動に着目して、「客観的に測る」ことが

研究のフォーカスとなる。Aさんが測っても、Bさんが測ってもCさんが測っても同じような結果が出る尺度を作ることに熱中する。いかに客観的に測るかということに力点があるからです。

それに対して解釈的なメタアプローチでは、観察可能な行動に目をつけると言うよりも、自分がフィールドワークをしている場に埋め込まれている意味に着目する、着眼点がちょっと違います。その人がどうしてこの時にこういう行動をとったのかを理解しようとする、understanding「分かる」という事が研究のフォーカスになります。「測る」ことが研究のフォーカスになりがちな論理実証主義、「分かる」ことが中心の解釈的アプローチに対して、批判的なアプローチでは「変えていく」ことに研究の焦点があります。たとえば、女性の抑圧的な地位というものを、なぜ抑圧が起こっているかという構造を解き明かし、抑圧の少ない構造に変えていくことが研究の焦点となります。すごく戦闘的、要するに社会構造を変えていくということですから。マイノリティの立場を「変えていく」のが研究のフォーカス。研究することの意味は、社会を変えていく事であるという、そういう立場が批判的アプローチですね。

研究のフォーカス

- ・(実証的)観察可能な行動に着目。
客観的に「測る」ことに力点
- ・(解釈的)行動や状況に埋め込まれた意味に着目。「分かる」
- ・(批判的)不平等な社会構造や抑圧のパターンを「変えていく」

スライド10

【研究のプロセス】スライド11, 12

研究の目的やフォーカスが違えば、研究をどのような手続きで進めていくかも違います。論理実証主義では、心理学を勉強した方にはなじみのある事ですけど、因果関係ははっきりさせるためにノイズを除去する、そして変数をどのように変えて、条件をどのように変えればこういう結果が出たかという、変数操作とか、条件統制をすることが論理実証主義の研究の手続きになります。それに対して解釈的アプローチというのは、社会的相互作用や、Aさん、Bさん、Cさんの間でやりとりされる意味を分析するという

ことが研究プロセスの中心になる、意味を分かるということですよね。それに対して、批判的アプローチは、隠された権力による統制を解明し、社会構造や行動に変化をもたらそうと試みる。

そして、研究者のスタンス、研究者と対象者との距離の取り方も、三つのどのメタアプローチを取るかによって変わってくる。論理実証主義では、客観的にいろんなことを把握しようと思っておりますから、研究対象者との間に距離を取って客観的であろうとする。で、研究対象者は被験者とか、被調査者と呼ばれる。最近、日本心理学会の投稿規程では、被験者とか被調査者という用語を使わないで、研究協力者と呼ぶことが推奨されておりますが。どう呼ぼうと、要するに研究室に来てもらって実験に協力してもらう人は、研究者の指示に従う受動的な情報提供者、研究者の指示に従って実験で動いてもらわないと困るので、自発性を発揮して勝手なことをやれば、使えないデータとして分析データのなかから除かれます。それが、論理実証主義。解釈的アプローチというのは、主観的であることをいとわない。相手に対して能動的な協力者になってもらいたい。相手が生活している場の仲間に入れてもらう、これが参与観察というフィールドワークの手法ですけれども。相手の生活している場、教室なり児童公園なりに入れてもらってそこで一緒に場を共有することによって、相手がどのような世界に生きているか、その相手が生きている意味の世界というものを理解したいと思う。そういうのが、解釈的アプローチですね。それに対して、批判的なメタアプローチというのは、批判的意識の覚醒、私が悪いから収入が稼げないからワーキングプアになった、私がちゃんと学校で勉強しなかったからこんなふうになった、そういうふうに私個人の属性に帰するのではなくて、社会構造というものがあなたを派遣労働者というワーキングプアの地位にさせている、そのメカニズムというものを明らかにする。で、研究者は、研究対象

研究のプロセス

- ・（実証的）ノイズの除去 因果関係把握 条件統制、変数操作
- ・（解釈的）社会的相互作用やそこで伝達されている意味を分析する。 意味の理解
- ・（批判的）隠された権力による統制を解明し、構造や行動に変化を持ちこむ

スライド11

研究者のスタンス・対象者との関係

- ・（実証的）研究対象との間に距離をとる；
客観的であることを標榜
被験者・被調査者と呼ばれ、研究者の指示にしたがう受動的な情報提供者
- ・（解釈的）研究対象の活動に参加する；
主観的であることをいとわない
能動的な協力者になってもらう
- ・（批判的）研究者は、批判的意識の覚醒を促す教師であり、対象者から学ぼうとする学習者でもある。協力的な学習者

スライド12

者、派遣労働者という立場の人から学ぼうとする。マイノリティの子供たちや、その親の経験から学ぼうとする。研究者は学習者でもあるし、対象者とともに学ぼうとする、そういうスタンスですね。スライド2で研究方法論の揺れという話をしましたが、本質主義か構築主義かでどのように研究スタンスが違ってくるのかということが、お分かりいただけたかと思います。どのような研究方法論に立って研究するかには自覚的にならなければならないのです。

【文化概念の揺れとアイデンティティ研究】スライド13

次に文化概念の揺れというものが、どのような問題をアイデンティティ研究にもたらしめているかということについてお話したいと思います。今使われている文化概念は二つあります。伝統的な文化概念は土地と結びついた固有の実体としての「文化」。たとえば、日本文化とかアメリカ文化とか、カナダの文化とかいう場合には日本とか、アメリカとか国土と結びついたかたちで文化を考えているわけですから、それは土地

文化概念の揺れとアイデンティティ研究

- ・ 伝統的な土地と結びついた固定した実体として文化を考える。
境界に囲まれた一枚岩的で自明な統一体
「日本文化」、「アメリカ文化」とい用語の背後にある考え方
- ・ Globalizationで、この暗黙の前提が崩壊
文化は、本来、Hybridで流動的なもの
文化を国家から切り離し、文化過程として考える
この考えに基づくアイデンティティ概念は、「状況に応じて変わる何者か」、モザイク状のアイデンティティ

スライド13

と結びついた文化概念です。これは伝統的な文化の捉え方で、境界に囲まれた内側に、日本なら日本特有の文化があるとか、アメリカという国境に囲まれた内側は一枚岩的で、自明な統一体としての文化があると想定する。文化比較研究では、アメリカでデータを取って、日本でデータを取って、それから韓国でデータを取って日米韓間の比較をするというスタイルのものがたくさん出ていますが、そういう研究手法をとる背景には、一枚岩的な日本文化というものに満たされた場があり、その日本文化に満たされた場の中で生きている人たち、それぞれが日本文化の一部を自分たちの内側に取り込んでいると考えて、その人たちによって答えられたアンケート調査というものは日本文化を代表していると想定する。研究者自身はそういうことは絶対言いませんけれども、リサーチデザインの中に既に境界に囲まれた一枚岩的で自明な統一体としての文化概念を暗黙のうちに取り込んでいます。そのような暗黙の前提を自覚しているかどうかは問題。皆さんには、研究デザインを立てる場合に自分がどんな暗黙の前提に立っているのかということに自覚してほしいと思います。私が社会学の修士課程在学中に受けた演習で、論文のなかの implicit assumption を全部書き出せといった課題が出されたことを、今

でもよく覚えています。さまざまな暗黙の前提のもとでわれわれは研究しています。最大の暗黙の前提が、論理実証主義とか解釈的アプローチというメタアプローチに関わるものです。どういう存在論、どういう認識論に立っているかということと共に、どういう文化概念を使うかがもう一つの暗黙の前提になっているのです。

1980年以前、文化人類学は、いわゆる未開の文化とかトロブリアンド島の文化とかサモアの文化とか土地に結びついた文化概念を使っていました。サモアはマーガレット・ミードが1926年にフィールドワークをした島ですが、インターネットもなければ、電話もなかった太平洋の島に住む人々の独自の文化が存在していたわけです。ところが1980年代以降のグローバリゼーション進行下では、アメリカやカナダにホームステイに出した娘から毎日のようにインターネットで何かを言ってくる、もう日本につながれちゃっているわけですね。何のためにホームステイに行ったのかわからなくなる感じがして、親御さんが「インターネット禁止！ホームステイしてる間は、そっちの文化に浸れ」って言ったという話を聞きました。せっかくアメリカとかカナダとかオーストラリアへホームステイに行ったのに相手の家庭の中の文化にどっぷり入るよりも、日本にインターネットでつながっているようでは、「異文化体験」にはなりません。インターネット、それから飛行機、テレビだって世界中のチャンネルが見れますし、日本のアニメも世界中に輸出されているし、ピカチュウをアメリカのアニメだと思ってるアメリカの子供たちがたくさんいるわけです。ですから「文化」というものがそれが発生したoriginの場所にずっと留まっているということは、グローバリゼーションの中ではもうないわけです。グローバリゼーションは、境界に囲まれた一枚岩的な自明の統一体としての文化という前提自身を崩してしまった。文化は、本来いろんな物が流れ込むハイブリッドな物であり、時々刻々と変わって行くと考えた方がいいのではないかと、昔から「文化」は、そうであったのではと考え直されるようになりました。カステラというのはポルトガル人が種子島に上陸した頃の桃山時代に持ち込まれたものらしいとか、日本の文化と思っていたけども、コリアンの影響を受けていたとかで、「日本の文化」といわれているものも色んなものからできたハイブリッドなものではなかったかと、文化概念の問い直しが必然的に起こってきました。1980年代後半あたりから文化を土地や国家から切り離し、文化をコンテンツとしてみる伝統的な概念化に代わり、プロセスとして見る見方が広まってきました。グローバリゼーション時代の文化というものは、色んな所から色んなものが入り込んでいて常に変わりうるモノ、しかも変化の速度が速くなる。「文化」をプロセスとして考えたほうが、現実を捉えやすいと思うようになってきたわけです。文化概念がこういうふうになると、当然文化的アイデンティティ概念も変わらざるをえない。継承語とか

バイリンガルリズムだとかは、グローバリゼーションが進行し、人の動きが活発になってきたこととリンクした現象です。日本に難民として来たベトナム人だってベトナム本国に帰るかもしれないし、アメリカにも親戚がいるかもしれない、「文化」を境界の中に閉じ込めておけなくなった。新しい文化概念が必要になってきたゆえんです。

【アイデンティティ研究の諸相】スライド14

文化は境界に囲まれた不変な実体という考えがあります。もう一つの文化概念は、文化は、常に変わる流動的でハイブリッドなものであるという考えです。この2つの文化概念と2つの方法論上の立場（本質主義と構築主義）を組み合わせたものがスライド14の表です。アイデンティティ研究には、前述の本質主義と結びついたアイデンティティ研究と構築主義的なアイデンティティ研究があります。わかりやすくマトリックスふう書くと、スライド14に表示したように四つ次元になります。

本質主義に立ちながら、ハイブリッドな文化概念を採用することはできません。文化を流動的（fluid）なものと考えることは、本質的で不変な文化を想定しないということです。従来、表の×の部分は、ロジカルに存在しえないわけです。従来のアイデンティティ研究は、文化を不変なものと考え、論理実証主義の方法論を採用してきました。構築主義が入ってきて表の（2）、（3）のタイプの研究が出現してきました。アイデンティティ研究には、私の整理では三つの枠組があると思いますので、この三つについて見ておきます。まずはじめの（1）、不変の「文化」という文化概念に基づき研究するアプローチ。不変の文化へのアプローチにも、本質主義と構築主義では「問い」の発し方が違うんですね。スライド14の表の（1）研究では、アイデンティティを個人の属性と捉え、この個人に固有の属性（アイデンティティ）を測ろうとする。アイデンティティ尺度、

アイデンティティ研究の諸相			
		方法論上の立場	
		本質主義	構築主義
文化概念	不変の文化	従来の研究(1)	(2)
	文化はHybrid		新しいタイプの研究(3)
	文化はFluid	X	
外部世界の構造の認識と人間内部の心理的ダイナミズム			

スライド14

「不変の文化」へのアプローチの違い
・ (1)は、従来のアプローチ アイデンティティという個人に固有のものがあるという前提で、アイデンティティ尺度(Marcia)を使う。社会の文化は実在する。 アイデンティティ概念は、「私が単一の何者かであること」 ・ (2)の構築主義的アプローチ なぜ、文化や国家は不変と感ぜられるのか？ 「日本文化」があるという考えがなぜ多くの人に共有されるに至るのか？
Anderson, B. 1983 『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』（日本語訳、1987）

スライド15

Marciaの尺度が有名ですがけれども、この尺度では、文化は実在すると考えます。アイデンティティ尺度を、継承語を習いに来ている子供ですとか、バイリンガルの子供たちに実施して、identity established ですとか identity diffused とか、identity undecided とか、判定を書き込んでいく。アイデンティティを個人の属性として、一元的に決めていこうというそういう考え方に基づく、この類の研究は心理学では山ほどあります。だいたい従来の研究は (1) の系譜に属します。

それに対して、(2) の構築主義的アプローチでは「問い」の発し方自体が変わってきます。具体的に言いますと、日本文化があるという考えがなぜ多くの人に共有されるに至るのかを問います。日本文化があるという前提のもとにその日本文化をマイノリティの子はどの程度取り入れているのか、その同化度を測るという発想の研究は、(1) ですよ、そうじゃなくて、「日本文化がある」というような感覚がなぜ多くの人に共有されているのかを問います。この考え方を最初に出したベネディクト・アンダーソンは、「想像の共同体」(imagined community) という用語を発明しました。Imagined community の一つ、「国家というものは、平等な国民の一体的な共同統治機構というフィクションである」という。で、国民国家はイメージとして心の中に想像されたものであって実体ではない、構築されたモノであることを喝破しました。これが構築主義的な国家観 (nation state) の走り、1989年にアメリカにフルブライト・スカラーとして行ったときに、評判になっていて、読み出したんですが、そのときはよく意味がわからなかった。今読むと分かりますが……。ですから社会人類学、マクロな文化や国家の問題を扱う人類学の分野ではアンダーソンのこの著作が、構築主義的なアプローチで文化とか国家とかを研究する契機をつくったと考えています。国家というものが共同幻想として機能するための仕掛けのもう一つが、パスポート。どのくらい前からパスポートがありましたでしょうか？ ゲーテがイタリアを旅したときに彼はパスポートを持っていたらどうか？ 要するにパスポートというのは国家、nation state のボーダーを防衛するためのひとつの手段なわけですよ。ですからパスポートの発明自体が、国家を実体であるかのごとくみせる社会的装置です。選挙権も、そうですよね。そういうさまざまな社会装置が nation state という実体があるかのような幻想を人々にあたえる。そう考えさせるようにみなさんを仕向ける社会装置である。そういう考え方をするのが構築主義的アプローチです。しかしながら、1979年に私が学位論文をUCLAに提出した頃はそういった考えはいまだ出現していず、従来の立場 (1) で研究をしていました。

【時間をどう扱うか】スライド16

一応、学位論文は出したんですが、どうしてもうまく扱えなかったのが、時間の問題でした。アイデンティティ研究は必然的に時間の流れを含む。私の研究では、アメリカ滞在中の3年から4年、日本に帰国後も同じ子供を追跡しました。その間、子供は成長して小学生が中学生になる、5年間ぐらい追跡すると個人の発達とアイデンティティの変化が必然的に生起します。小学4

年生のメンタリティと中学3年のメンタリティとでは、同じ子どもでも全然違うわけです。個人の発達による変化なのか、文化間移動をしたことによるアイデンティティの変化なのかは全くわからない。個人の発達の軸というものをどういうふうに取り込むかということは、アイデンティティ研究の課題です。

それからもうひとつは、時代の流れとアイデンティティ。神戸にありますカナディアンアカデミーというところの全卒業生の調査をしたことがあるのですが、戦前に来日して、カナディアンアカデミーに通学していた人と、終戦後に来た人、それから高度成長期以降に来ていた人では、来日の背景にある日米関係が違うわけですね。戦前に来た人にとって日本は途上国です。終戦後に来た人の目には日本は戦争で敗れた貧乏国、アメリカンドリームを実現したリッチな国から来ている人は、日本を見下げる気持ちがある。高度成長期以降は日本語を習う人の数が増えました。日本語が話せることはアメリカに帰国後の就職のチャンスを増やすからでした。時代の流れ、歴史の流れで二つの国の力関係が変わる、その力関係が変わることがホスト社会の言語を学ぶかどうかに影響する。そういうことが、国際結婚で生まれた子どもの文化的アイデンティティに影響するわけですね。ですから、文化的アイデンティティ研究の場合、個人の発達という時間軸をどうとらえるかというのと、時代の流れという時間軸をどうとらえるかという、この2つの時間の流れが交錯するなかでアイデンティティが形成されるという視点が必要になります。これを実際の研究でどう扱うかという問題は非常に難しい。結局、私は一時点で止めることにしました。子どもの成長の流れに沿っていくと変わり続けるので、永遠に学位論文は書けないので、それで1979年8月時点でピリオドを打ち、ピンで留めたようなかたちにして、そのときの横断面を書いたのが、『子供の異文化体験』という本なんです。そうすることで失われるものは多かったです。時代の流

時間をどう扱うか？

アイデンティティ研究は、必然的に時間の流れを含む

- ・個人の発達の軸による変化
- ・時代の流れ

二つの時間の流れの交錯するなかでアイデンティティは紡がれていく。

それを把握できる研究方法はどれか？

スライド16

れ、成長の流れという動態を取り込みながら、アイデンティティの問題を議論するとい
 うことができなかったのです。で、そういう動態を把握する方法論を模索していました。
 そうして出会ったのが構築主義的アプローチであり、文化をハイブリッドなものと考え
 る見方でした。

【個人と環境の相互作用をどう概念化するか】スライド17

もうひとつは、環境と個人の関係ですね。アイデンティティの問題は、Assimila-
 tion-Reproduction model と一般的に言われている枠組で研究されることが多かった。
 個人はホスト社会に入って、ホスト社会の文化化の圧力の受け手となる。日本に来たベ
 トナム人の子供とか日系ブラジル人の子供は、ホスト社会日本の文化の受け手であると
 ともに、自分の親の文化の受け手でもあります。双方の文化をどの程度自分の中に取り
 入れて (assimilate)、再生産する (reproduce) のか、そういう観点から研究されて
 きました。そこでは、あくまでも研究対象者を受動的にとらえていたわけです。これが、
 論理実証主義的アプローチの限界だと私は思います。

しかし、時間の流れを取り入れながら構築主義的な研究をやろうということになると、
 subject as an active agent、すなわち研究対象者を能動的な (active) エージェン
 ト、主体的にいろんなこと決めるエージェントというふうに見方を変える必要があるわ
 けです。で、先ほどのスライド12で、研究対象者をどんなふうに捉え、研究者と研究
 対象者の関係をどんなふうに築くかという話をしましたけれど、それと同じ考えです。
 subject as an active agent、そういう考えに立って文化的アイデンティティの研究
 をやる場合には、アイデンティティを個人の不変の属性とは考えない。周囲との関係で
 決まる流動的なものであると考える。それから文化的アイデンティティは主観的現象で
 あるということです。客観的に文化的アイデンティティを測定しようとしな。主
 体のポジショニング (positioning) やサ
 ブジェクティビティ (subjectivity) とい
 うものを重視して、アクティブなエージェ
 ントが環境との相互作用のなかで一定の位
 置取りをしていく過程としてアイデンティ
 ティを見ていこうとする。

個人と環境の相互作用をどう概念化するか

- 従来の研究
 Assimilation-Reproduction model
 個人は、環境からの文化化の受け手
- 構築主義的研究
 Subjects as Active agents
 主体のpositioningやsubjectivityを重視
 文化は主観的現象である
 アイデンティティは、個人の属性ではなく、周
 囲との関係で決まる動的なもの

スライド17

【アイデンティティ研究の新潮流】スライド18, 19

構築主義的方法論に立ち、かつ、文化はハイブリッドなもの、常に変わる fluid なものという概念化のもとでアイデンティティ研究をする潮流が、スライド14の(3)で、新しいタイプの研究です。この新潮流のなかに、表象重視と経験重視という2つの立場があります。この2つは、解釈的アプローチの系譜に属しますが、もうひとつ批判的アプローチに立つアイデンティティ研究もあります。

表象重視と言われているのは、カルチュラル・スタディーズの系譜に属します。カルチュラル・スタディーズというのはスチュワート・ホールという人が言い出したことで、メディア研究から派生してきているんですけれども、ある特定の表象がどのようにして社会的力をつけて、広く流布するに至るのか、他者から投げかけられる表象に個人はどう対応していくのか、といった研究をしています。この個人の対応の仕方をポジショニングという用語で表しています。要するに、アイデンティティはポジショニングの仕方であるという認識ですよね。

ポジショニングの一番わかりやすい例は、“Black is beautiful”です。黒人（ブラック）は今までネガティブな表象に考えられていた、一番ネガティブな表象でした。すなわち、白人に対して下位の位置を取らされていたんですけれども、それを逆転させるポジショニングをとろうという宣言ともいえます。ホワイトとかブラックとか、ブラウンとかイエローとかの人種関係（racial relationship）の表象の中で、ブラックは下位にポジショニング（位置づけ）されていた。それに対して、Black is beautiful と唱えることによって、逆転させる。Black is bad じゃなくて Black is beautiful と誇りを持って、ポジショニングを変えていこう。その合言葉だったわけです。

みなさんに関係の深いバイリンガリズム研究では、ハーフじゃなくてダブルだという

文化はfluidで、本来hybridなものという考えによる
アイデンティティ研究の新潮流

1) 表象重視: Cultural Studiesの系譜

ある特定の表象がどのように社会的力を得ていくか？
個人は、それにどう対応していくか？

identityは、positioning の仕方である。

渋谷真樹 2001 『帰国子女』の位置取りの政治

2) 経験重視: HabitusとPractice

個々人は、文化接触場面でどのような経験をしているか？

subjectivity: 公的表象と自己意識の主体との相互
作用の結果がidentity
他者からどうみなされるか？

スライド18

アイデンティティ研究の新潮流 cont'd

3) 批判的アプローチに立つ文化アイデンティティ研究
Cultural Studiesとの近縁性

山内裕子氏による日系ブラジル人研究

戴エカ 『多文化主義とディアスポラ』

個人に多様なpositioningを許す社会
サンフランシスコ と 大阪

スライド19

人も出てきました。ハーフと名乗るか、ダブルと名乗るかは、アイデンティティのあり方を示します。「ハーフ」という一般的表象に対して、ハーフじゃなくてダブルだよという自分のポジションを主体的に押し出していくということですね。一般的に流布している社会的表象に対して、自分はどのようなポジション取りをするのかということが、アイデンティティであると考えます。たぶん、このポジショニングという概念を日本で一番初めに本格的な研究のツールとして使ったのは、渋谷真樹さんの『帰国子女の位置取りの政治』という本です。位置取りは英語でいうとポジショニングということです。帰国子女が一般生に対して、どのようなポジショニングをしているのかということを帰国子女学級の中での先生と帰国生、帰国生同士、それから帰国子女学級と学校全体の中での一般生との関係性を観察し、それを描いています。スチュアート・ホールのカルチュラル・スタディーズを理論枠組として使いながら、ポジショニングという観点からアイデンティティを研究した、日本語で読める学術書です。この立場のアイデンティティ研究をさらに知りたい方は、スチュアート・ホールのいろんな著作、一部は翻訳されていますので、それらを読まれることをお勧めします。

表象を重視したアイデンティティ研究に対して、経験を重視する系譜の一連のアイデンティティ研究があります。個々人が文化接触場面でどのような経験をしているのか、その経験を事細かに聞いていく、研究対象になっている人の主観 (subjectivity) を丁寧に聞いていく。cultural studies ではマジョリティが作り出す公的表象の圧倒的力に主体がどう向き合うかが問題でしたが、経験重視派は、公的表象と自己意識、主体との相互作用の結果がアイデンティティという考え方です。ポジショニングと半ば重なりながら、半ばずれているというのがこの考え方です。

新潮流の三番目は、批判的アプローチに立つアイデンティティ研究で、カルチュラル・スタディーズとある部分では重なり、近縁性があります。山ノ内裕子さんが日系ブラジル人の研究（本になってなくっていろんな論文のかたちで公表）で批判的アプローチを採用しています。どういうことかという、日系ブラジル人はマイノリティではあるけれども、彼女、彼たちにインタビューしてみると、日本人の同級生たちを小馬鹿にしているというのか、くだらん学校の規則に縛られているかわいそうなやつらと見なしている。そして自分たちは学校にイヤリングもしていきし、お化粧もしていきし、携帯も持っていき。学校なんてくそくらえ、みたいな抵抗するポジションを取っていることが描かれています。要するに自分を少し高い位置に置く、そして日本の子たちが日本の中学校のこうるさい規則に縛られているのを、そんなに縛られてないでうちちょっと自由にやりなよ、みたいな批判的な立場で見ている。そういうふうなことを、負け惜しみとか強

がりと解釈する人もいるでしょうが、山ノ内さんは、ひょっとしたら日本の硬直した学校文化を壊す契機になるのではと学校の権威に抵抗する彼らのエネルギーを肯定的に解釈し、そういう感じで日系ブラジル人の子供たちのアイデンティティや行動のありかたを描いています。

そしてもうひとつ、心にとめておいてほしいと思うのは、まわりの世界の認識と人間の内部の心理の関係、人間内部の心理的ダイナミズムっていうのは精神ですよね、絶望とか希望とか恨みとかコンフリクトとかいう心理状態ですよね。外部世界の構造というのは太陽系の構造とか、人間の精神の外にあるようなもの、結局、アイデンティティというのは心理の問題ですけれども、外にある社会構造とも関係があります。

戴エイカさんが明石書店から1999年に出版された『多文化主義とディアスポラ』は、在日の人たちが日本では低位の位置取りを余儀なくされていたけれども、多様なポジショニングを許すサンフランシスコに行くとは非常に生き生きとすることを、在日コリアンでアメリカに留学した人たちをサンフランシスコでインタビューすることで明らかにしています。サンフランシスコは、ゲイシティといわれるくらい sexual identity にも寛容で、個人に多様なポジショニングを許す雰囲気満ちている。支配的な公的表象を押しつける雰囲気がないサンフランシスコでは非常に生き生きとするんだけど、大阪に帰ってくるとペしゃんこになってしまう。エイカさんがフィールドワークした頃の話ですけれども、多様な個人のポジショニングを許すような社会、それが多文化社会であるということもできるかと思います。

【質的研究の重視】 スライド20

アイデンティティ研究の三つの新潮流は、公的表象に対する位置取りを重視したカルチュラル・スタディーズの立場を取るか、主観的な人それぞれの経験というものを重視するか、批判的アプローチに立つか、だいたい3つくらいに分かれることを話してきました。そうすると従来の研究で多用されてきた質問紙調査 (questionnaire study) はpositioning とか subjectivity を探るにはあまり有効ではない。構築主義的な研究には、ナラティブ (語り) とかフィールドワークなどの質的研究方法が必要になっ

質的研究の重視

- Subjectivityを探るtoolとしてのnarrative
Linger No One Home: Brazilian Selves
Remade in Japan
「個々人がどのような生活世界を生きているか」を聞き取る
- 語られざるpositioningやsubjectivityを探る研究手法としてのフィールドワーク

スライド20

できます。個々人がどのような生活体験をし、そのなかでどのような意味の世界を築いているかを丁寧に聞き取っていくことが必要です。語られざるポジショニングとかサブジェクティビティを探っていくためには、実際に教室に入れてもらったり、その子たちがたくさんいるところに行ってフィールドワークをします。量的に計測して、客観性を担保しようとするよりも、ナラティブとかフィールドワークを基本的な研究方法として重要視します。そのような研究例の代表的なものが “No One Home: Brazilian Selves Remade in Japan” です。これは名古屋市の郊外にある団地に一年間住みこんで、・・・リンガーさんはポルトガル語も英語もできたので、家族で保見団地に住んで、そこに居住する日系ブラジル人の何人かにインタビューし、日本に住むことの意味を探っています。非常に読みやすくて、ナラティブアプローチを使ってブラジリアンセルフというものの、日系ブラジル人の自己意識、アイデンティティが日本で生活するうちにどのように作り変えられていったかを提示した本です。

【研究は時代の産物】スライド21

だいたい私が準備したのは、これくらいなんですけれども、私も70歳になりまして、自らの足取りを振り返ると、私の研究自体が時代の産物であったことを強く感じます。カナダの大学院に入ったのは1973年で、社会学コースに在籍しました。UCLAの人類学科に入ったのは1975年、その頃は論理実証主義一辺倒で、伝統的な文化概念が支配的でした。構築主義なんて聞いたこともなかったです。で、文化概念は昔の

「研究」は時代の産物：自らの足取りを振り返って

- 論理実証主義全盛、伝統的文化概念
 1970年代後半、UCLA、文化人類学科
 1979 Life In-Between: The acquisition of cultural identity among Japanese children living in the United States.
 1984 子供の異文化体験：人格形成過程の心理人類学的研究
 2003 上記の増補改訂版（構築主義へ）
- 1980年中業に大変動
 - 1983 Imagined Communities(1991 revised ed.
 1987 日本語訳、1991 増補版訳)
 - 1986 Writing Culture (1996日本語訳)
 - 1990 Cultural identity of diaspora (Hall)
 - 1992 The question of cultural identity (Hall)

スライド21

ままで、そういった中で1979年に私は学位論文を出しました。日本に帰ってから、子どもたちの帰国後の様子をフォローアップしたデータも加えて1984年に『子供の異文化体験』を上梓いたしました。この本でも基本的に私は論理実証主義の枠組で書いています。アイデンティティは時間軸とともに変わっていくのにどうしてもそこを掬い取る方法がわからないままでした。幸いにして、2003年に増補改訂版を出す機会に、1984年から2003年のほぼ20年間に文化概念をめぐる起こった潮流の変化を付論「文化接触研究の理論化に向けて一構築主義の立場から」で書き足しました。その増補版で書いたことが今日の話の後半になります。1983年、さきほど申しましたように、

Imagined Community (「想像の共同体」)の初版が出ましたが、これがひとつのインパクトとなりました。それからもうひとつ重要なことが1986年に出版されたWriting Culture (「文化を書く」というタイトルで、大阪大学の文化人類学グループが翻訳し、紀伊国屋書店から刊行)です。これは文化というものをどう捉えて研究していくかを問い直す契機となった本で、アメリカ流の構築主義の考え方を提示しており、文化人類学ではこの本以前か以降かで、研究のスタイルも変わったし、論文の書き方も変わったといわれるくらい、大きなインパクトがありました。スチュワート・ホールのCultural Identity of Diaspora (1990)とThe Question of Cultural Identity (1992)の出版もポジショニングの概念を普及させた記念碑的な著作だと私は思います。「位置取り」なんて用語を書いている場合は、スチュワート・ホールのカルチュラル・スタディーズの影響を受けた研究だと思ってよろしいです。このほかにもいろいろありますけれども、文化的アイデンティティを考える場合の概念枠組には、1980年代中頃に一度、1990年代にもう一度大変動があった。文化概念ならびに研究方法論における地殻変動が論理実証主義、本質主義から構築主義への流れを作った。日本の場合は、心理学は構築主義よりも論理実証主義がまだ強い、一部の心理学、特に発達心理学、社会心理学、文化心理学ではわりに構築主義的なものの考え方が受け入れられるようになってきました。Culture & Psychologyという構築主義的な心理学研究を掲載する雑誌も1995年に発刊されました。社会学では完全にもう本質主義から構築主義に移ってしまって、今の大学院生に話をしますと、構築主義しか知らないですね。それから文化人類学も構築主義に移行してしまっている。言語学はどういうふうになっているか知りませんが、ですから社会心理学とか文化人類学とか言語学とか、いずれの分野にしろ、社会文化的な背景や文化的アイデンティティの研究をしようと思う人は、こういう時代の流れを一応、弁えておいたほうがいいと思うんですね。70歳になった私から見ますと、研究はほんとに時代の産物としみじみと思います。今の若い方はあと50年、今と同じようなスタンスで研究できるかというところちょっとあやしいですね。私自身の研究生活の中で大きな地殻変動を経験し、それに応じて私も変わりましたからね。もう時間が、タイムアップになりました。質問を受ける時間がなくなっていましたことお詫び致します。